

# 俺の記

尾崎放哉

青空文庫



俺には名前がない、但し人間が付けてくれたのは有るが、其れを云ふのは暫く差控へて置かう。

だが、何も恥かしいので云はぬと云ふわけでは毛頭ない。云ひにくいから云はないのだ。外になんにも理窟はない、冬になれば雪が降る、夜になれば暗くなる、腹が減つたら食ふのだ、一体、理窟と云ふ物も、あとから無理に拵へてクツ付けるので、なす事、する事、始めから一一理窟で割り出して来る物ではない。

余計な事は抜きとして、処で、俺は今年で丁度三つになった。とは、人間なみに云つて見たので、俺の世界には歳も何も有つた物ではない。元日が大晦日だらうが、大晦日が元日ならうが、とんと、感じの無い方だ。

次は、俺の棲つてゐる処だが、御江戸日本橋のマン中と云ひたくても、実の処、其の隅ツ子の端ツコの、八百八町の埃や塵が抜け出す穴見たいな処だ。其の証拠には、俺が居る家の門の前を、毎朝、毎晩、雨が降つても雪が降つても、乃至、太陽に黒点が表はれやうとも、不相変のゴロくくくく、百五十万人の糞を車に積んで、板橋とやら云ふ方へ引つぱつて行くのでもわかる。嘘だと思ふなら試に来て見給へ。で、この辺一体の地名は、

慥か、向が岡、又、弥生が岡、一名向陵、乃至は武陵原頭なんかと、洒落れて云ふ人もある。其処に六軒、カラ／＼した家が並んで立つてゐる。尤も、俺が始めて此処に来た時分は五軒しかなかつた。自治寮と云ふのが家の名ださうだ。自治の城とも云ふ人間もある様だが、其実、城処の騒か、家と云ふのも勿体ない位、何時見てもカラ／＼してゐる奴で、湿り気は微塵もない、それで以て、汚い事、古い事、セントルイスの博覧会にこれを出したら、蓋し、金牌物だらうと云ふ話し。筑波風おろしが、少しでも疋しんにゆうをかけて来ると、ミシ／＼、ミシ／＼と鳴り出す仕末、棺桶で無いから輪がはづれたとて、グニヤリと死人がころげ出す事もあるまいが、もし此家が壊れたら、飛び出す者は鼠一匹処の話ではない。現に、この自治寮に住つてゐる学生と云ふ人間が、其数約六百は居る。それに俺等の仲間で、此家に棲つてゐる連中が、丁度、五十位は有るから、合計六百五十位は居るだらう。俺等も人間とイツシヨに数へると、人間が怒るかも知れんが、チツとも怖くない。俺も今年で三歳子だ、金魚なら一匹十五六銭はする頃だ。甘いも酔いも、随分心得たつもりさ。

これから、愈、俺の記となるのだが、扱、こゝ話しかけて見ると、何だかブーツとしてしまつて、遠方の方で生えかけの口鬚でも見る様に、どれが鬚だか眉毛だか、彷彿として霞の中だ。誠に、今昔の感に堪へん氣持がして来る。が、まづ俺が最初此処にやつて来

た、其折の頃からボツ／＼とやらかさうか。なに、俺だつて、もと／＼こんな処に居りはしなかつたので、矢張り店屋の軒で、ブラ／＼と呑気に遊んで居たのだが、丁度、今から三年前さ、同じ仲間の奴とイツシヨに十計り、此家に持つて来られたのだ。運と云ふ奴は妙なものさね、どんな拍子で、ドー舞台が廻つて行くのだから、カイクレわけが解らない奴よ。未来と云ふ物は、思へば面白い、俺等の運命をどうにでも使つて見せる。

此の面白いと云ふのは、要するに、未来なるものゝ性質が解らんからだ。嗚呼未来乎、未来乎だ。総て、面白いとか、怖いとか云ふ奴は、其の対称物の性質不明の点に於て、尤も多く存在する様に思はれる。人間が好んで対外マツチを見るが如く、つまり、其結果の不明な意に、趣味を持つてやつてゐるのだ。又、人間は、幽霊と云ふ奴が怖いさうだが、これもつまりは、幽霊なるものゝ性質が、尾花で有るのか、杓子であるのか、乃至は、物干台の浴衣であるのか、其辺の消息に不明の点があるによつて、怖いに違ひない。

そんな事は、ドーでもいゝとして、要するに、俺が此家へ持つて来られたと云ふのは、俺の記をして、素敵な彩色を織り出さしめた物であつた。思へば、過去三年の間、可笑しい事もあつたし、愉快な事も有つたし、或は悲しい事も、辛い事も有つた。

処で、我輩等の今の境遇はドーだと云ふと、愉快だと云ふ仲間も居るし、中には面白く

ないと云ふ仲間もある。しかし、俺は、愉快だとも、乃至、面白く無いとも思はんよ。何だと思ふつて、何とも思はんのさ。と云つたからつて意志が無いと思はれては困るね。面白い事と、悲しい事と、差引勘定零ぜろ。此点に於て、何も思はん事となるのさ。一と二と三と加へて、一と二と三と引けば、差引勘定零。此処に於て、何も無い事となるのさ。花が咲いて、花が散つて、何も無い事となるのだ。と云つて、此の無と云ふのは、無には相違ないけれ共、絶対的の無ではない。無にして無にあらざ、では有るのかと云ふと有るのでもない、何の事やら訳のわからぬ物だ。しかし、考へて見給へ、人間が此世に生れて来て、十歳で死なうが、二十歳で死なうが、乃至、百歳で死なうが、皆死んでしまふ。即、生と死、差引勘定零となるのだが、即ちこの零、即死なるものに於ては一だが、其の死に至る間のプロセスに至つては、実に、千変万化である。どんなプロセスでも、死に至ると零となるけれ共、其零となる所以のものを考へて見るのは、面白くない事ではない。否、人生の楽しむ可き処は、そのプロセスに有るのだ。プロセスの原で、人間は操られて居るのではないか。此所に於てか、此の「零」なる物の価値や、中々重大なる物と云はねばならない。換言すれば、零は同じく零であつても、零の属性が異つて居るのだ。人間は、此の属性の異なる可き処に、多大の趣味を持つて働いてゐる。又、そしなければならぬのだ。

話が、えらく横丁の方へ這入つて居たが、扱、俺等が、此の自治寮に持つて来られた、と直ぐ分れ／＼にされて、俺は北寮と云ふ処に行く事となつた。此所にも俺の仲間が五つ計り居つたが、一処に集つて居る事の出来ないのが、俺等の性分なので、一ツ／＼離れて、そして、明けても晩れても、チツとして居るのだ。嗚呼、俺とイツシヨに持つて来られた連中は、今頃、何処にどーして居るだらうと思ふと、さすがに初旅の、心細くないでも無かつた。それに、俺等の役目は夜働くので、盜棒では無いよ、夜と云へば、総ての物は皆地平線下に這入つてしまふ時だのに、物好きにも、一人起きてゐるのかと思へば、つく／＼、人間が恨めしい。何だつて、俺等を夜働かせるのは、人間がそーさせるからだもの。人間位、悪好者な者はない。しかも、針の穴程の知恵を持つて居て、それで、自惚加減と来たら、まるで、御話しにならない奴さ。第一人間を製造する事が出来ない様な知恵で以て、それで万物の靈長とはどーした者だ。動物には理性が無いだの、猿には毛が三本足りないだの、大きな御世話だ。乃至、鳥は空を飛ぶ物だの、飯は食ふものだの、しかも俺等の仲間は生命なきもの、意識なきもの也と、抜かすではないか、チャンチャラ可笑しくつて、御臍が御茶を湧かして、煮えてこぼれてしまふは、人間が勝手にこしらへた、一人ヨガリの理窟とか、道理とか云ふものを見給へ、こんな、愚にも付かん事が、よく云はれた

物さ。俺見たいな物でも思ふね。人間のする事、なす事、云ふ事、皆、何等かの（仮定）と云ふ物を宥<sup>ゆる</sup>して居るのだ。「仮定」の二字を人間から取つてしまつたら、人間はどうする気だらう。それこそ、二進<sup>につち</sup>も三進<sup>さつち</sup>も、動きが取れた物では無い。学者と云ふ人間の口から、「此の仮定をゆるして」と云ふ言葉を取つてしまつたら、後には、何が残つて居るだらう。しかも、此仮定が永久に説明の出来んものだから、猶更、面白いではないか。○《ゼロ》とは何だ、一とは何、一と一を加へて二となるとは何だ、一と一を加へ二となると云ふ仮定を「宥す」と云ふなら、一と一を加へて三となるといふ仮定も「宥され」なると云ふ理窟は、俺等の世界には無いのだ。

要するに、二にならうが、三にならうが、随意に宥すのだから、泥田から出て来た足さ。こんな幼稚な事で満足して居て、しかも、俺等の事は、生なき物だと云ふ人間は、どこ迄馬鹿だらう、ズー／＼しいだらう。俺等の仲間と話しあふ言葉、成程、人間には解らないだらう。併し、解らないからつて、有る物は矢張り有る。昼でも空には星がある。もし夜と云ふ物がなかつたら、人間には、美しい星の輝きは、永久に見られなかつただらう。

人間の知恵といふ奴は、大凡、こんな物だ。こんな話は抜きにして、此の北寮には、学生が七十人計り居る。但し、女は一人も居ない。必ずやなれば、洗濯屋の婆々だらう。名



は体を現はすと云ふから、北寮丈に、ホク／＼してゐるかと思つたが、年中、苦虫を噛みつぶした様な婆々さ。俺が北寮へ来てから二三日の間は、只ブラ／＼と、さして大變動もなく暮して居たが、いや／＼も、其の騒がしい事、汚い事。笑ふ、叫ぶ、唸る、泣きはしまいが、塵埃濛々然としてゐる中で、騒ぐは／＼。三日目の晩、これが、俺の生涯忘れられないと云ふ日だ。なに老爺の命日だらう。それ処の話ではないさ。その晩にあつた事は、それから、百度や二百度の事ではなく有つた。現に今ありつつ有るから、俺も追々と、怖いく／＼から、何ともなくなり、今では面白い方になつて来たのだ。何ンしろ、来てからやつと三日目の晩だから、どーしてまだ尻が落ちつくものか。尤も、俺の尻は何時も落付かない。丁度、嫁入つた当座の気持だか、どーだか知らないが、怖い様な、悲しい様な、それが夜中の十一時過、この頃になると、電気燈連の方は、みんな寝てしまふので、俺達ばかり、眠さうな眼付でパチクリ／＼。間もなう十二時、上野の鐘がゴーンと、後高に撞いてしまふと、思ひ出した様に犬の遠吠。湿っぽい風が陰にこもつて、サラ／＼／＼と云ふ奴。天地万象、シーンとした丑三ツの時、此所に出て来た物は何だと思ふ。無論、幽々と云ひたいが、処がさうでない。

俺は、其時丁度、二階の梯子を上りきつた処に、ブランコをきめて居たのだ。すると此

時、すぐ家の外でワツワツと云ふ人の声、ハテナと思つて居ると、だん／＼と其声が、北寮に近寄つて来る。益 近くなつて来る、足音が聞える。云ふうちに梯子を上つて来る。人数は六人計り、勿論学生、コハ／＼物で覗いて居ると、其内の一人、石白の御化け見たいな奴が、何と思つたか俺をグツと捉へて、引きずり下した。驚いてキヤツと云つたが、例の人間には通ぜぬ奴で、俺の頭を握つたまゝで、デカンシヨ／＼で三年暮す、後の四年は呑んでとほす、コリヤ／＼ドン／＼／＼と、足踏みをしながら、わめき散らして行くのだ。怖い者見たしで、糞落付に落付いて、ソツと見下げると、中には、俺のよく知つた奴即、北寮に居る奴で、後から解つたが、此奴の名はニグロと云ふのだ。昼間はみんなスマシタ物で、大人しさうな顔付をして歩いてゐたが、此時の様子たら、どーだ、まるで章魚坊主の調錬、顔はマツ赤、一人マツ青なものも居た。で腹を出して、鉢巻をして、中には禪一つのも居たよ。君に見せたら何と云ふだらう。非常に酒くさいと云ふ事は無論だ。その内に、とある一室の戸をガラ／＼と開けて、六人がドラ／＼と転げ込んだな。俺を掲げて居る石白君がまつ先でよ、見ると、此処は寢室さ、七八人寝て居たゞらう、すると、ドーダ、今の六人の化物は、何の事ない枕を蹴とばす、布団をはねる、机を飛ばす、夢に牡丹餅ならだが、夢に章魚では一寸噛み切れないだらう。処で、寝て居る連中は、定めて

驚くだらうと思ひの外、案外だつたね、何の怒る処か、但しボンヤリした、不得要領な顔付はして居たが、起されても、寂しさうな笑ひを、無理に構造して居る、何笑ひと云ふのであるか、但し、実によく馴らした物だな、と、俺も全く感心してしまつたよ。例の章魚連は、間断なく、部屋中を飛んだり跳ねたり、なに俺も止むを得んから、イツシヨに飛んだり跳ねたりしたさ。まるで天の岩屋を眼の前に見る心地。其内、大分勞れて来たと思えて、一寸、静かになつて来たと思ふと、サー大變、何と思つたか、俺を握つて居た例の石白め、窓をあけたと思ふが早いか、ヤツと、オツポリ出した。無論俺をだ。オヤと思ふ内に、クル〜と眼の球がまはる。するとポチヤン、頭をイヤと云ふ程打ち付けた、と、それきり氣絶してしまつたのだ。

フト、生氣が付いて見ると、コリヤどーぢや、自分は、何時の間にやら立派な衣服を着て、人間になつて居る。眼の前を見ると、豚や、牛肉や、西洋料理は申すに不及、栗饅、煎餅、最中、に至る迄、すっかり喰ひ頃に出来てゐる。グルリと見渡すと、こゝには瓢箪形の酒の池だ。上加減と云ふので、白い煙がフワ〜と立ち上つてゐる塩梅<sup>あんばい</sup>。何処からともなく音楽が聞えて来る。ホワイトローズの香は、室内に充ち〜て、氣も心もとろけ出してしまひさう。と、こんな事は嘘さ、それ処か、実は、何時の間にやら夜があけて居

て、よくよく見ると、俺は一人で草の中に寝て居るのだ。併かも、頭の処に大怪我をして居るが、余り痛くもない。雀の子が、チュウ〜と二三羽飛んで来て、珍らしさうな顔付をして、俺を見て居る。「才早つ」と云はうとしたが、声を出す元氣も無い。ボンヤリして居ると、頭の中に浮んで来るのは、昨夜の大難だ。化物が踊つてゐる処から、枕を蹴り飛ばす処、それから、石臼が俺を窓から投げ出した事。俄然、グイと、俺を引っぱり上げた者がある。又かと思つて、南無阿と云ひかけたが、フト見ると、俺を捕まへて居るのは、俺と仲の好い、小使の雑巾爺さ。ヤレ〜と胸を撫でて居ると、小使の奴は、何やらブツ〜と云ひながら歩いて行く。俺は、左の手にブラ下つて居たのだが、右の手の方を見ると、それにも俺の仲間が三ツ計りブラ下つて居る。どれも怪我をして居る様だ。妙な事もある物だと思つてゐる内、何処だか、暗い部屋へ、イツシヨに投げこまれてしまった。すると、ドーだ、此処にも俺の仲間が、六ツバカリ坐つて居るではないか。しかも皆、同じ様に怪我をして居るから妙だ。「イヨー」と挨拶すると、向ふは「ヨー」と氣のない返事をする。何の事やら解らない。まづ、ヤツと腰が落付いた様だから、つらく見渡すと、天窓からさし込んで来る、ボンヤリした光線の中に、俺等の仲間が、今やつて来たのも加へて、総計十二居る様だ。そろひも揃つた仏頂顔でスマシテ居る。スルト、俺の向ふ

側に坐つて居た奴が、「貴様等もト〜来たね」と云つた。其声が、馬鹿に優しかつたので、俺も元氣付いて、定めて驚くだらうと、得意になつて、昨夜の一部始終を話したのだ。併し、此奴のみならず、側に坐つて居る連中も、スマした物で、丁度、生徒の講義して居るのを、先生が聞いて居る様な顔付で、解り切つた事だ、と云はぬ計り。頗る俺の癪すこぶにさはるのみならず、バツがわるいので、「君は何時此処へ来たのですか」と、少し大きな声で書いてやつた。すると、「何時つて、今度で四度目さ」、どうだえらいだらうと云ふ鼻付、何がえらいのか俺には解らぬ。「フーン」と不得要領な返事をして居ると、中で「俺は三度目さ」と云つた奴がある。「俺は二度目だ」と云ふ声が続いて出た。五ツ六ツこんな事を云つた。どれも負けぬ氣と見える。負けたつて、ど〜でもいゝではないか。二度なら遂に二度、一度なら遂に一度ではないか。要するに、二が一になれはすまいし、一度が二度になれはすまい。太陽と月と、どつちが好いと云つた処で、太陽は矢張り太陽だ、月は矢張り月だ。外の連中は、皆こんどが始めてだと見えて、だまつて居る。何となく座が白けて来る。沈んで来る。皆、怒つた様な面をして居る。俺はこのめ入ると云ふ程、氣に向かん事はない。沈んで居つても一日、浮んで居つても一日、白けて居つても一日、黒けて居つても一日、乃至、怒つても一日、笑つても一日だ。沈んで白けて怒つて居るより

も、むしろ、黒けて浮んで笑つて居る方が、何ぼーいゝか解りやしない。徳利よりか瓢箪、と云ふのが俺の主義、さうさ。主義だから、早速、俺の左に坐つて居た奴を捕へて話しかけた。「君もこん度が始めだね」と、聞くと「そーだ」と云ふ。「どんな風だったい」と、チヨツカイをかけると、すぐ拘かかつたね。「矢張り君の話の通りさ。だが、君とは又、変つた事もあつたよ」と来た。「なる程」と答へると「君の時は六人ださうだが、俺の時は一人だった。しかも其奴の色の黒い事、漆を塗つて其上に油をかけて、又、其上に磨きをかけて、そして、サハラ沙漠で一年乾かした、と云ふ奴だ」「なる程な」、「時は十二時過ぎよ。君と同じ様に、寢室に這入つて騒いだね。しかもこの沙漠先生、頗る付の話し好きと見えて、ドツカと坐りこんだなり、いや話すはく。笑つて見たり、怒つて見たりの一人舞台だ。此間約一時間。なに俺は、側そばで昵ぢつと居眠の練習さ。スルト沙漠先生、ヒヨロ／＼と立つて、ガラス窓をあけたと思ひ給へ。丁度、昨夜は十五日だ、満月さ。虫は鳴かなかつたが、皎々たる盆大の明光、中天に懸つて水の滴りさうな奴。長天織影なく、大他閑寂どうどたり、清爽寥然として向陵一夜秋懐深してんだ。起きて居るのは、例の沙漠先生と、憧どうど々たる俺ばかりさ。突如、ザーと飛瀑の音を聞き得たり。何と思ふつて、小便の音さ。しかしそー笑ふ勿れだ。此の時程俺は、美しくう感じた事は無かつたよ。全く美化された

ね、俺も沙漠先生も、殊に小便がだ。小便をするは須くすべから此時に於てす可しだ。名月、沙漠男、慥に俳句にはなるよ。美と云ふ奴は妙なもので、とんでもない物が、非常な美と変化する事がある。尤も、裸体が美の真髓だなど云ふ、此頃ださうだからね。悪に強きものは、善にも強しと云ふと、えらく寺の和尚の説法めいては居るが、全くだ。要するに、非常な極端と極端とは、又、尤も近い物で有つて、其間の差は、到底、認める事が出来ん。咲き揃つた万朶の花と、それから、散つてしまつた花とは、一は繁榮の極で、一は凋落の極だが、其咲いてそして散る時の美、考へて見ると、分秒の間髪を入れない処に有る刹那だね。知つてるかもしらんが、「見渡せば桜の中の賭博哉」と云ふ句が有るが、此時の賭博は、ずんと美しいではないか。此の間髪を入れずと云ふ処が面白い。ヤツと云ふ間に頸が落ちる、と云ふ処が面白い。頸の有る人間と、頸の無い人間と、それが、たんだ、ヤツと云ふ間に定まると云ふ、イヤ面白いぞ〜。

扱、其続きだが、小便の音もぢきにや遏んでしまつた。と思ふ内、沙漠先生、何と思つたか俺を捕へた。と、それから後は君と同じ。グル〜のボチヤンさ」「オヤ〜そーかい」「中々小むづかしい事を云ふ奴だな、と思つて居ると、向うの方に居た奴が、「そーあんまり驚かない様にしろ、これからそんな事は毎夜だよ」此の赤毛布奴あかけつとめ、と云ふ顔付。古

毛布め、何をぬかすと思つたが、此奴、一番眠氣覚しにしてやらうと思つたから、「そかね、君等は随分古顔だから、中々面白い事が有つたでせうね」と云ふと、遂々やり出した。「そりや有るさ。君等に話した処で、到底、まだ解らんだらうが、未だ、これから、生末の長い君等だから、随分、後学の為にもなるであらう、忘れない様に、聞いて置いたらよからうさ。俺は、此処に来てから四年になるのだ。始めて来た時は、東寮と云ふ処に居たのだ。君等は未だ見ないかも知れんが、此寮なぞよりはズツト高い三階だ。三階は三階でも、（三界に身の置き処なし三世相）と云ふ奴で、監獄と思へば余り間違ひはないよ。大きい丈に、生徒の数も二百計りは居る様だ。数が多いだけに又、変つた事も大有りだ。さうさね、随分話しになりさうな事はあるが、フーさうだ、君等は未だ、人間の死ぬる、勿論、自殺する処を見た事はあるまい。——なに五六遍見たつて。それはえらい。なんだ例の鐘や太鼓の調子でやるのだらうて、何の事だいそれは。芝居でだつて、馬鹿にするない、そんなケチ臭いのではないよ、赤毛布を被つてソロ／＼匍ひ込む、そんなではないのだ。さすがは、高陵の健男子とか云ふ丈に、立派な物だつたよ。あゝ、今思ひ出しても、気の毒でならんわい。丁度、今から一年前だ。秋風蕭殺の気が、天地に籠つて、涼しい／＼が、寒い／＼にならうと云ふ時、死にそくなつた狂蝶が、まつ白な桜の返り花に、冷た



い残骸を乗せて居ようと云ふ頃、一夜、矢張り十一時過ぎ、俺は三階の窓の上で、暫く無  
我の体だつた。ツイと、何気なく下を見ると、窓に立つてゐる人がある。青白い月光に、  
片頬丈ゲツソリとこけたのが、透き通る様に見える。しかも、眼にキラ／＼と輝く物は、  
露か涙か、初めには君等の知つてる、例の化物連中かとも思つたが、容子がドーも変だ、  
一口も物を云はないで、立つてる事半時計り。俄然、ヒラリと動いたと思ふが早いか、窓  
から、大地に向けてツルリ、真つ逆様、ドタリと音が聞えたきり、向陵は、又も寂寞に帰  
つてしまつた。勿論、自殺さ。此時の俺は、人間では無いが恐ろしかつたね。ドーして死  
ぬ氣になつたであらう。さつきから、開いたまゝの窓の処を見てゐると、ボヤツと見える  
のは、今のゲツソリ頬のこけた人の顔だしかも半面鮮血淋漓、ゾツとして眼をしばたゝく  
と、窓は矢つ張りあいたまゝで、斜に、月の光が画の様。三階から飛び降りて死ぬる、何  
としたはかない運命であつたらう。三階が人を殺す道具にならうとは、蓋し、何人も始め  
から思ひ付く人はあるまい。三階とて人間の棲む処だ。それが、人を殺す処となる。俺は、  
いろんな事を考へて見た。刃、劍、鉄砲、毒薬、病、これ等は、吾々が人を殺し得る物と、  
普通に知つて居る物だが、人を殺すものは、ドーして、それ処では無い。手拭でも殺せる、  
棒でも殺せる、足でも殺せる、瀑に落ちても死ぬる、噴火口に這入つても死ぬる、戦争で

も死ぬる、乃至、三階でも死ぬるではないか。地球上、至る処は死に道具で満ちて居る様に思はれる。吾々は、如何なる処でも、何を以てでも、どう云ふ方法でも、直ちに死ぬる事が出来る。吾々が呼吸してゐる、空気を吸ふのは生きる所以で、吐き出すのは死ぬる所。以か、乃至、吐くので生きてゐる、吸ふので死ぬるのか。どつちに転んでも、すぐ死ぬるのだ。吸うたり、吐いたり、其処で吾人は生きて居るではないか。吾々は、死なうと思へば、何時でも死に得る。それを、危い呼吸で生きて居るのではないか。死ぬると云ふ事は、何だか、この呼吸の面白さを解して居ない様に見える。しかし、俺の考が間違つてゐるのかも知れない。想像は想像を生み出して、止む時がない。死ぬる事ばかりでは無く、総ての事柄は、此の呼吸でやつて行く様だ。ヤツと云ふ間に、舞台は、クラリ／＼と變つて行く。過去六十年の歴史は、此のヤツと云ふ呼吸から出て来た火花だ。両国で火花を見る時、パンと音がして、サツと幾百条の赤い光線が出る。光線は即人間の歴史で、美しい面白いが、其パンと云ふ音の方が、俺には面白いと思はれる。宇宙は、総てこの「パン」「サツ」で以て出来てゐる。「パン」を知つたら、「サツ」は解る。「サツ」を見ても、「パン」は中々解らない。此の頃は、眼で殺される人間も有ると云ふが、此の「パン」「サツ」を知らないからだと思ふ。

自殺から、とんだ話になったが、まだく面白く事があるよ。君等は未だ日が浅いから、此処に居る生徒の氣質なども、よく解らんだらうが、中々、面白い処があるよ。俺はさいく例の化物連の御かげで、と云ふのは、化物は俺を忘れて行つてくれたからで、自修室に、二三日も遊んで居た事があるが、いや中々の面白さ。君が居る北寮の、四番室と云ふ処に居つた時も、随分愉快だつたよ。あすこには、慥かに五人居たと思つたが、今でもそこ知らん、支那人も一人居つた様だ。人数は少ないが、騒いで、唸る、踊る、喰ふ、しかも議論がすさまじい、イヤ、ともすると、真に口角泡を飛ばして、まるで烏賊の墨を吹く様、汚なくて、はたには寄り付かれない始末だ。或日の事、中の騒人、頭の馬鹿に大きい男が、少々、風の気味と云ふので、切りと、猫の様なクシヤミをして居る。すると、其すぐ向ひ側に居た色の白い男が、平生、毒舌を以て自任して居るさうだが、「風邪を引く様な不景氣な奴は早く寝てしまへ」と云つたのだ。処が、それから大議論さ。「引いた物は引いた物だい」と大頭が云ふ。全く怒つて居た様だ。「引かない物は引かないさ」と、白頭は軽く流す。「貴様は、風を引かないのを得意として居るけれ共、抑、そもそも世人皆風邪を引かざる時は、風邪薬屋は如何せん。貴様はドダイ個人主義だからだめだ。二十世紀は、社会（全体）主義でなくてはいかんよ。世の中は、一本立では遂になる能はず、寄りつ寄

られつ、吹きつ吹かれつ、と云ふ処で以て社会あり、国家有焉き。貴様には、自分の辜丸より外には無い物と思つてるからいかん。凡て、社会（全体）主義なるものゝ有難さを、君等見たいな個人主義者に、例を以て示してやらう」、「成可くなら食物の例でたのむよ」と、白頭が茶化す。「え、黙つて居ろ。君等も十人十色と云ふ事位は知つて居るだらう。要するに、十人十色とは「異」と云ふ事を通俗的に云つたものだ。「異」とは、即「異」で有つて「異なれり」だ。凡そ宇宙間に同じ物は一つもない。なに有る、何だつて、君と大頭とは同じ物だつて、よせ、馬鹿野郎！」白頭は笑ひながら曰くさ「それは笑談だが、実際、僕は有ると思ふ。近い処が、男と女とは同じものだ。夜と昼、天と地、美と醜、君の財布と俺の財布などは、皆同じ物だ。試に云はんだ、今世界に男と云ふ者が無かつたらば、如何なる者を女と云ふやだ。同じく女が無かつたら男も無い。要するに男と女は同じ物だ。美人と云ふのは醜人があるからなのだ。醜が無かつたら美は無い。美が無かつたら勿論醜もない。美醜こゝに於て一なりだ。君の財布と、俺の財布が同一物なる事は、君も知つてるだらう。要するに、親と云ふのは、子が有るから云ふので、子が無かつたら親は無い。親が無かつたら、無論、子は無い。即、子と親とは同一物だ。此所に於て、親の物は子の物なり、と云ふ推定に到着するのだ。も少し本を読んで来給へだ」、すると大頭、

怒るまい事か「馬鹿云へ、そんな黑白同一論位は、小学校の時に読んでしまつて、今では忘れてしまつたのだ。第一、そんな拡充の異つた言葉を捕へて、俺の目を眩惑させよ」とした処で、支那人とは少し違つてらい。も少し本を読んで来いだ。そんな足台の暗い論はよして、俺の云ふ事でも、筆記して置くべしだ。処で、其の何だ、宇宙間の物総べて異なつて居るのは真理なのだ、で、思ふにだな、どーして斯う異つて居るだらう。同じ物が一つも無いとは、不思議の極ではないか。しかしよく考へて見ると、此処が即我が社会（全体）主義の、尤も有難き所以なので有つて、異つて居ると云ふのが、即、御互ひに相依らなければならぬと云ふ所以なのだ。今社会、少なくとも本郷辺の人間の顔付が、みんな同一恰好になつてしまつたとして見ろ、其の混雑はどーだらう。鐘や太鼓で以て「我夫わいのー」「我妻わいのー」「我兄わいのー」で、探し廻らんければならぬ。さ、かう云ふ混雑のない為に、チャンと様々な異つた顔付に作つて有ると云ふのは、どーだ、人間が社会的、相対的動物なる可き最大証拠ではないか。未だある。此総ての点に於て、異つて居ると云ふのは、畢竟ずるに、あらゆる進歩が生じて来る処であつて、異つて居る処が、平和に、静穩に行く唯一の所以で有るのだ。笑つてばかり居る人も有らう。怒つてばかり居る人もあらう。泣いてばかり居る人もあらう。しかし、かく異つて居る処で平均が取れて

行く。皆人間が笑つてばかり居たり、もしくは怒つてばかり居たらどーだ。或は、弥次くつて、饒舌しやべくり廻る人もあらう。黙つて寝て居る人も有らう。走つて居る人もあらう。歩いて居る人も有らう。かく異つて居るから、万事平均が取れて、うまく運びが取れて行くのだ。もし皆が弥次くり廻つたり、饒舌くり廻つたりして居たなら、其騒ぎはどーだらう。以上に述べた通り、人間がかく総ての点で異つて居ると云ふのが、即、人間は社会（全体）主義者ならざるべからず、相対的ならざるべからざると云ふ所以の物だ。君の如き白い頭にも、大分これで解する処が有つたらう。即、我輩が風を引いたる所以も解つたであらう。風邪を引いた者もあり、引かぬ者もあり、即之、進歩のある所以、平和のある所以、平均のある所以、相対的なる所以なりだ」

「イヨー、中々くはしい説明だね。併し矢つ張り風は治らん様に見えるな」と、白頭がヘラズ口を叩いて居る時、カラ／＼と戸を開けて歸つて来たのは、今迄留守で有つた仲間の一人だ。馬鹿に瘦せた処が幽霊じみて居るので、幽霊とも、ネーベルガイスターとも云ふ名ださうな。今迄、ムキになつて居た二人は、俄に向きなほつて、「歸つたか」と云ふ。幽霊は「オー」と云ひながら、成程、幽霊的な細い手を袂に入れて、掻き廻して居たが、「ソラ」と云ひながら、大頭の前に何か投げ出した。「何だ」と云ひ乍ら大頭は、つと其

物を見たが、俄然、大きな顔に壊れる様な笑顔を見せて、「有難い、君ならなくてだ、浮んだよ」と云ふ。「其の大頭がか」、と白頭は笑ひながら、其或物を手に取つて見せたが、其処には、「風邪薬実効散」と書いて有つた。幽霊は得意気な顔付をし、傍に立つてスマして居る。成程、柄に無い親切な男だな、と俺も思つた。しかし此の親切も、金が有る時だけかも知れん。すると白頭は、矢張り口が悪い生れ付きかもしらんが、大頭に向つて「君、この薬は一服散と書いて有るぜ。一服丈吞まなければ治らないと見えるぜ」、と云ふと、「馬鹿な、一服丈なんて奴があるかい。一服で治らなかつた時は二服吞むんだ」と大頭は云ふ。「処が、そーで無い。見給へ、二服吞めば旧もとに帰ると書いて有るよ」、と白頭が真面目で云ふ。と幽霊が、「三服吞めば死ぬると書いてあるだらう」と笑ふ。すると三人が一時にドツと笑つた。俺も可笑しかつたから、だんまつて笑つた。

支那人は、スマシタ顔をして、鏡と首引をして居る。スルト、又ガラ／＼と戸を開けて残りの一人が歸つて来た。図書館に行つて居たと見えて本をかゝへて居る。これは又、馬鹿に色の黒い奴だ。室に入るや否や、「オイ何処かへ行かう、腹が減つておへぬ」と云ふ。「金は有るかい」と白頭が、嘲弄的の横目を見せる。「有る／＼」と幽霊が、スマシタ顔付をして云ふ。話しは直にまとまつて、何だかワヤ／＼と云ひながら、四人で部屋を出て

行つた。隣の部屋の時計は九時を打つた。四人は何処へ行つたのか、支那人は不相変、夜だか、昼だか解らん様な顔をしてゐる。つい眠くなつたので、俺もツルリと寝込んでしまつた。

と、云ふ様な様子さ、中々面白かつた。

其のあくる日も愉快な事があつた。学校は二時半迄だと見えて、それ迄はソハ／＼して居る様だ。二時半の鐘が打つてしまふと、四人がノビ／＼した顔をして歸つて来た。一人は手紙を書き出した。一人はサンドウをふつて居る。一人は財布をひろげて居る。一人は窓からボンヤリ眺めて居る。スルト窓の外から、「ドーダイ」と云ひ乍ら、顔丈出した奴が居る。「ドーした」と白頭が云ふと、「今日は旧同室会だから残つて居るのだ」と云ひながら、肱立をして窓を越えて部屋に這入つて来た。しかも靴のまゝだから驚く。よく見ると、顔の黒い、汚い容子をして居る。しかも其背丈が約四尺もあらうか、「チビ」と云ふ名ださうなが、成程、浅草者だと、俺もつく／＼感心して、出来る事なら、親の顔も見てやりたかつた。併し「チビ」先生は、土足でも、すこむるすました者で、話す、笑ふ、煙草を吸ふ、勉強もしないで饒舌くつて居る。何だか、又、議論が始まつた様だ。「君はそんな事を云ふが、ハイカラと云つても、必ずしも排斥す可き者では無い」と白



頭がチビに向つて云つた。「勿論、我々は鬘カラーを以て自任して居る。大人君子、向陵の健児にして理想としてゐる物だから、鬘カラーは大いに賞す可しだ。が、併しだ、君だつて花見に行かぬ事はあるまい。月を賞せぬ事は無いだらう。今、ハイカラーを見るにだ、頭の髪をスツカリと奇麗に分けた処は、丁度、雌浪雄浪がド〜と、寄せては返す如く。雪の様に白い、しかも高いカラー、折目のシヤンとした洋服で以て、スラリと立つた所は、第一奇麗ぢや無いか。我輩は敢て華美を云ふのではない。清潔を云ふのだ。清潔は我四綱領の一つを占めて居る。翻つて、バンカラーを見るにだ、尤も近き例は君さ、モシヤ〜と味噌玉に菌の生えた様な頭で、シヤツの鈕ボタンはまるで無しさ。帯は割けてゐる、袴はポロ〜さ。おまけに異様な汚臭を放つに至つては、公平な眼を以て、決して左袒さたんする事は出来ないよ。我輩、豈敢て形式のみを云はんやだ。成程、天真爛 は好いさ。しかし、今世界の人間がすつかり、マツ裸で往来したら何と思ふ、我輩が決して疑はない真理が有る。即「美は隠すに有り」だ。早い話が、今もし僕が君に向つて、「大馬鹿め、死んでしまへ」と云つたら、仮令たとひ、友人の情で怒らぬかもしらんが、面白くないだらう、さ、其れを心に隠して居て、何も云はない、知らん顔して居る、と云ふ処で何事も美しくう行くのではな  
いか。美は隠すに有りだよ。なんだか矢たらに形式にばかり走ると思ふかもしらんが、そ

「ではない。と云ふのは、此ハイカラなる者は、僕は無邪気だと思ふ。即悪気と云ふ物がない。即悪う云へば、少々御目出度い方かも知らんが、天真だと思ふ。頭を分けて、たのしんで居る処は無邪気ではないか。以て愛す可しだ。反対で、蛮カラーと云ふ奴は、表裏は天真ラシイかも知れないが、僕はどーも陰険だと思ふな。かう云ふと君は蛮カラ也、故に陰険也と来るかもしれないが、君丈は例外だ。之は証明するのは苦しいが、慥に、一筋縄では行かぬ人間だ。えらい奴も有らうが、悪党もきつと蛮カラーに有るよ。だから僕は蛮カラー親しむ可からず、ハイカラー愛す可しと云ふのだ。どうだい」、水でもほしいと云ふ顔付だが、可愛さうに、此の大議論に誰も耳をかたむける者がなかつた。

かれこれする中に、四時になつた。すると「チビ」は「僕はもー行かう、失敬」と、又、窓から出て行つた。まるで猫だ。「ヤイ、余り呑むな」、大頭が首を出して笑つた。室の中は、今の「チビ」が穿いて来た靴の泥で、すこむる汚なくなつた。「汚いなー、どうも通学生は個人主義でいかん。自分が居らんからつて、まるでメチャだ。通学生位、癪にさはる奴は無いよ」と、コボしてゐるのは大頭だ。しかし実を云ふと、俺の見てる中に、此の大頭先生も窓から出た事があつた。

人間と云ふ者は、得手勝手な者だな、と、俺はつく／＼思つた。得手勝手と云ふ事は、

欲目と云ふ事だ。鼻負目ひいきめと云ふ事だ。鼻負目と云ふのは、善い事が悪う見えたり、悪い事が善く見えたりする事だ。自分がえらく思へたり、露西亞が自分で強く見えたり、月が太陽より大きく見えたり、星が笑つて居る様子に見えたり、董が泣いてる様に思つたり、昼よりも夜が明るく見えたり、西瓜が幽霊と思へたり、汽車よりも自動車がい早い様に思へたりするの、皆、此の得手勝手から生ずるのだと思へば、得手勝手も、中々詩的な物だと、俺は一人考へて居たのであつた。

扱、こんな様子で、俺は二三日、四番室で遊んで居たが、目に見えて感心したのは、此の四人だ。そりや中々悪口もつくし、悪戯もするが、もとく悪気が有つてゝは無いので、其中のいゝ事は、まるで一心同体だ。起きるのも諸共、騒ぐのも諸共、甘い物を喰ふ時も諸共、寝るのも諸共、俺もつく／＼羨ましい位であつた。話しは、中々これ位な事ではない。併し、随分長話をした様であつたが、少しは君等には解つたかい」と、これで四年目の先生の話は終つたのであつた。「いやどーも大したもので」と、実は俺も内心此奴の経験の複雑なのに、少々感心してしまつた。他の若い連中も、皆感心して居る様だ。すると、又、口を切つた者がある。

「俺も君等に、自慢話をして聞かせようかな。俺は四年君とは、少々方面の異つた方で、

四年君が旅順と云ふなら、俺の方は沙河とでも云ひたいね」鬚があつたら捻りたいと云ふ処だが、生憎、鬚もなければ手も無いから致し方がない。「其れは聞き物だな」、一同がおだてると、其の話しは次の様であつた。

「実は、俺がこれ迄行つてゐた方は、小使部屋、雪隠、湯殿、などの方面だつた。俺が初めて来た折は、西寮の小使部屋へ持つて行かれたのさ。勿論小使部屋だ、マツチ箱の様な中に持つて来て、角火鉢、大薬罐、炭取、箒、寝台、布団、机、鈴、乃至茶碗、土瓶、飯箱、鉄串に至るまで、まるで足の踏み処も無い始末、もし火事が始まつた時には、小使はキツト焼け死ぬるに異ひないと思つた。秋小口はさうでもないが、追々と、富士山が白うなつて来る頃になると、小使部屋の火鉢にだんくと、炭をたくさんつき出す、それと共に、生徒がこの狭い小使部屋に押しかけて来る。小使の椅子をチャンと占領してしまつて、火鉢をグルリツと取りまく。尤も、こんな事をやるのは古い生徒ばかりだが、すると小使は、法螺貝の中から追ひ出されたヤドカリと云ふ見えで、傍にシヨンボリと、斑になつた小倉服を衣て、寒さうに立つて見てゐる。コツチは一向頓着なしで以て、笑つたり、うなつたり、小使なる者の存在は、もとより眼中に無いので、時によると、国から可愛い息子に送つて来た餅だの、魚だのを持つて来て、鉄串で焼いて喰ふ。皆、狼の様な連中だもの、

御溜りコボシが有るものか、あはれ息子に、あの可愛い息子に喰はせようと、はる／＼送つて来た餅は、支那の様に、見る間に蚕養せられてしまつて、肝心の息子様は、ヤツト一つ、呑みこんだか呑み込まんかと云ふ有様、もし、ソロ／＼嚙んで居ようものなら、それこそ、半分も此の息子は喰はなかつたであらう。俺はつらく／＼考へたね、決して江戸に出て居る息子なぞに、餅を送つてやつたりする者ではないと。

或日の事で有つたが、朝から、ドン／＼と云ふ大雪、小使部屋は従つて素敵な人数、小使は壁の方に押し付けられて、小さくなつて居る。も少し押ししたら、小使は大方、壁の中に塗り込まれてしまふだらうと、心配した程だつた。従つて、話も随分始まる。一番火鉢の傍にかまへて居た、化物見たいな生徒が、「そー、メチャ／＼に云ふ程でもない、酒を呑むつて、決して害計りは存在して居ないよ」と云つた。調子が、馬鹿に高かつたので、フイと耳を傾けると、「総て君、物には両面ありさ。楯の表裏も古い話しだが、行くと云ふ裏には帰ると云ふ奴が隠れてゐる。上ると云ふのは下ると云ふのを意味して居る。要するに、爛徳利主義と云ふのだ。とは、其れ爛徳利は銅壺の中に、這入つたり又出たり、出たり這入つたり、這入るのは即出るにある処、出るは即這入る処と云ふのさ。何しろ、善い処と悪い処とは必ずクツツ付いて居る物だ。一がいに、冬を寒いと云つて炬燵に尻を焙つ

て居る快樂を無視するのはいかん。成程、酒はストーム、始めてか知らんが、昨夜、君等が見たと云ふ化物連の事を、ストームと云ふのだ。其のストームの玉子かも知れん。だが、ストームの不快、利不利は別問題としてもだ、酒なる物が、所謂、大人君子連に、与へて居る利害の点に関して、ストーム以外に、猶大なる物があるであらうと思ふ。我輩は、酒その物が悪いと云ふ事を、しばし聞かされたが、此のその物が悪いと云ふ事は、根本的に云ひ得ない事だと思ふ。これは丁度、太陽その物が好いとか、悪いとか云ふのと同じで、全く、ノンセンスの話さ。即、我輩が述べたいのは、酒と吾々大人君子の境遇と、此の相互間の接触上に出て来る利害だ。其利害を云ふに付て、一応、我輩の所説、勿論、酒以外の、に付て聞いてもらはんければならない。

抑、吾々人間は、嗜好性と云ふ物を有してゐる。嗜好性を有して居ない人間は決してない。其嗜好してゐる物の、性質が高尚だとか、卑しいとか、高いとか、低いとか、そんな事は別問題として、兎に角に、人間には嗜好、何等かの嗜好がある。否、此嗜好が無ければ、人間は生存して居る事が出来ない、と云つても過言では無いと思ふ。吾々が、朝から晩迄、嫌ひな物計りやらされて居つた日には、どうして生きて居たいと云ふ考は出て来ない。此の嗜好、自分が好きな事をやる、と云ふ点で以て、人間は生存して居るのだ。所謂、

生きがひが有るのだ。此の嗜好は、人間の生命と云つてもよい。斯様な大切な物であるからして、もしかゝる嗜好が、他人からして奪はれる、取られてしまふ、もしくは、無くなると云ふ様な場合には、必ず、第二の、それに相応する、或は、それ以上の嗜好を求めんとして、働く、否遂に求めなければ止まないのだ。これは、事実を以て示さなくとも、解る筈だ。処で、吾々の今の状態はどうだ。成程、大人君子には相違ないけれ共、此の大人君子は、青年と云ふ大人君子だ。青年とは、他の言葉で以て云ふと、嗜好が非常に多い時代だ。何でも一寸気に向いた物は嗜好してしまふと云ふ時代なのだ。猫も来い、杓子も来い、と云ふ時代。成程浅いかもしらぬが、広いさ。かう云ふ時代に當つて、所謂、大人君子なるものに、酒と云ふ嗜好を与へて見るとする。すると其結果はどうだらう。此所で一寸、酒の性質に付て云ふ可き必要がある。酒ぐらゐ微妙な物は無い。詩的な物はない。酒を呑むと云ふと、妙に気が大きくなる。六大洲は掌位にしか見えた物では無い。酒を呑んで中には泣く奴も有らう、怒る奴も有らうが、まづ大抵の者は、非常に愉快になつて来る、面白くなつて来る、無邪気になる。千鳥足になつて来る。こんな一種云ふ可からざるミス・テイカルな性質を以て居る物は他には有るまい。扱、斯う云ふ素敵な、面白い、愉快的な酒なる者の趣味を、嗜好の馬鹿に多い、吾々大人君子に持つて来て与へるのだから、猫に鼠

だ。忽に酒が好きになると云ふのは、無理もない話だ。其結果はどうだらう。勿論、学生の境遇だから、毎日はやれないが、一週間に一度位宛、金の有る時は、同好を誘つて、酒を呑みに行く。愉快になる、無邪気になる、豪傑気取になる、大きくなる、菓子嫌ひになる、シルコが厭になる。凡そ、僕が知つてゐる酒党連中の経路は、以上の通りになつて行くのだ。此処で又考へて見るに、吾々の今の境遇で、酒の外に、猶、一層、強い嗜好力を有してゐる物が他に無いであらうか、と云ふと、それが大に有るのだ。しかも、大に危険なる物が有るので有る。処でだ、今此の酒党から、酒を呑むと云ふ嗜好を奪つてしまふと、其結果はどうで有らう。到底、其嗜好を取ると云ふ事は出来ないかも知れぬが、まづ出来るものとして見ると、其結果は、それ、酒以外に於て、それ以上に危険な嗜好を求めなければ過まない、と云ふ事になるは必定だ。かく云ふと或は君等の内に、そんな浅薄な議論はやめにしろ、小供に菓子をやつて置くのは、決して最後の目的では無い。君の云ふ事は、甚卑劣な、びほう弥縫策に過ぎない。君は、酒の嗜好を奪へば、他の危険なる嗜好に走ると云ふけれ共、元来、酒を呑まぬ者はどうする。況んや、酒が、吾々の身体、脳力、理性、品格等に及ぼす大害に至つては、到底、たやす容易く云ふを得ない。近くばストームを見よ、などと、我輩を攻撃するかも知れないが、我輩は尚、君等の説に、賛成する事は出来ない。



酒を吞まぬ人間とは、即酒を呑んでも吞めない、遂に酒の味を解する事が出来ない人間であるから、こんな人間は、酒に付て、かれこれ云ふ資格の無い者である。盲目は遂に向島の桜を語る可からずだ。一寸、云つて置きたいのは、酒を吞むと云ふ事と、大酒をするとか云ふ事を混用してもらつては困るよ。過度と云ふ事は、総てに於ていかん。豈独酒のみならんやだ。それから、君等が云ふ酒が身体等に及ぼす害だ。此の害と云ふ奴も、随分六かしい説明を要する事だらうと思ふが、少なくとも、僕の知つて居る処では、酒（大酒ぢやないよ）は、決して吾々の身体に、害を及ぼさないと確信して居る。医師が云ふ事などは勿論、吾々の眼中に無い。と云つて、頑冥インノセントブライド野蠻人、ガリ／＼亡者と思つては困る。要するに、医師と云ふ者は、出来る丈命を延ばしたいと云ふ処を目的として、割出すによつて、少しでも身体に、害になりさうな奴は、ドシ／＼、否定してしまふのだ。しかし吾々人間が、如何なる状態に於てもかまはず、匍つて居ても、寝て居ても、出来る丈、長命をすると云ふを以て、最終目的とす可きであらうかどうかと云ふ事は、中々むづかしい問題だ。僕に云はせればだ、春雨に叩かれながら、猶、枝にクツ付いて、まつ青に恨めしさうな梅の花よりも、寧ろ一夕の狂風に、満枝をアツサリと辞して去る桜花をこのむのである。現に医師の身知らずを實見するに至つては、御本人も、桜花をこのむと見え

る。短かい小便を垂れて、小さい糞をして、百迄生き延びた処で何になる。大飯を喰つて、大糞をたれて、定命五十年で、アツサリとやりたいではないか。かうなつて来ると、物の利害と云ふのは、君等の云ふ利害とは、少しく性質を異にして、来はしないかと思ふ。僕の云ふ処は、或は間違つて居るかも知れないが、僕は自ら好む処に随つて行くのみだ。糸瓜となつてブラ下らんよりは、西瓜となつて喰はれたいと云ふ奴だ。余けいな事だが、我輩が、屢、禁酒会員とか、禁酒会とか云ふ事を耳にする、この位可笑しい物はないと思ふ。酒屋連中と喧嘩する考へかも知れないが、甚以て意を得ない。早い話がだ、我々が、生徒会と云ふ物を作つて学校に行くとして見る、こんな馬鹿な事が有らうか。学校に行くのは、生徒会員でなくとも、生徒会員であつても行くのだ。生徒会が無けらねば、学校へ行かないと云ふ奴は、余程の馬鹿では無いか。禁酒会員なるものは、意志薄弱会、とでも改名した方がいいだらう」。酒でも一杯飲みたいと云ふ顔付。此時、「ライ食堂があいたぞ」と云ふ者がある。此一声で、蜘蛛の子を散らす如く、小使部屋は見る間に寂寞としてしまつたのであつた。

君等も、一度は小使部屋に這入つて見る可しだ。中々面白い事がある。だが、門衛の処も随分愉快だよ。全体、八時で禁出入とか云ふのださうだが、大嘘だ。九時になつても通

る、十時になつても通る、十一時、十二時になつても出入するよ。なに、札なんか裏返すものか。門衛の奴も、余程、呑気な奴でなければ出来る商売ぢやないね。朝から晩まで、壁を眺めて居たり、小便をしたり、人形を書いて見たり、新聞広告を読んで見たり、それで、夜中に寝てから迄、起きて出て戸を開けねばならないなんて、目出度い奴さ。それで以て、時には、生徒に虐待せられる事も有るのだもの。さうだ昨年であつたか、或晩、十一時も既に打つてしまつたので、門衛君が今や門を閉ぢようとした時、ヒヨロリ／＼と歸つて来たのが、生徒の奴さ、イキナリ「ヤイ門衛、俺の名を消せ、ケケケ消さぬか、野郎！」、門衛の、其のテカ／＼した頭を、ポカリと御見舞申さうとした時、又、やつて来たのが一人の生徒さ。これは酒に酔つて居ないと見えて「ヤイ、待て／＼、何だ」と、酔つて居た奴を抑へると、「放せ、放せつたら放せ、門衛の奴、自治の何たるかを解せない、見ろ、俺の名を消さんとぬかすのだ。かるが故に、一本ポカリと」、「まー待て、そりや君が悪いよ、大人しく歸つて寝ろ」、「何、俺が悪い、貴様も又、自治を解せないと見える。俺の言ふ処を暫く聞けだ。夫れだね、夫れ自治なるものは、一年や一年半、寮に居たとて、解る物ではない。少なくとも三年、多くは、四年居らんければ解らない。之を換言すれば、自治は無規則なり、規則無き也だ。而し、只之丈では、君見たいな一年級は、誤

解を来すだらう。無規則とは、要するに之、一種の規則であるのだ。『規則が無い』規則と云ふ規則なのだ。抑、自治には三階級がある。第一は真正の自治だ。第二は半自治だ。第三は似而非自治と云ふのだ。勿論、自治の目的は、この真正の自治となる処にあるのだ。けれ共、到底、吾々は真正の自治と云ふ物を見る事は出来ない。如何となればだ。追々むつかしくなるよ。如何となれば、前にも云つた通り、自治とは、無規則なりだから、人間の社会に於て、規則も何もなくなる。換言すれば、全くの平和的社会、理想的社会、トルストイが云ふ様な、無規則な社会と云ふものが、眼の前に現はれる時があるだらうかと云ふに、之は決して無いのだ。人間が二人以上、生存して居る間には、決してかゝる社会は出て来ない。即、真正の自治と云ふものは、人間消滅後に於て、実現し得可きものであるのだ。処で、其次が半自治と云ふ奴だ。吾々の自治寮は、即ちこの半自治の状態に有るのだ。半自治とは、換言すれば、規則が有つたり無かつたりと云ふ状態なのだ。我が自治寮の自治と云ふ奴は、今云ふ様な朦朧体である。ボンヤリした物である、以て行はれ易き所になりだ。併し、此のボンヤリ体、行燈体と云ふのは、尤も面白い奴で、自治はどうしても、此の行燈体でやらなくては成功しない。馬鹿に大きな火をおこすと餅が焦げてしまふ。ヌル／＼と焼く処で甘く出来るのだ。あつちに寄つたり、こつちに寄つたりで、舟は航海

が出来る。天気になつたり、雨が降つたり、照つたり降つたり、降つたり照つたり、ボンヤリした処で、甘く調子が取れて行く。此所に尤も味が有る処で、此処を一つ考へなければならぬのだ。甚だ、君等には要領を得にくいかも知らんが、大賢は市で騒ぐと云ふ事もある。瓢箪の様な、ノラクラした中に、チャンと腹のククリが有る。あの、括りがえらい処なのだ。動中の静、静中の動だか、よくは知らないが、人の顔立でもさうだ。目付が勝れていゝとか、耳がすぐれてよいとか、鼻がスラリとして居るとか、さう云ふ事は無いけれど、ボンヤリした顔全体その物に於て、立派な顔とか、美くしい顔とか、認める事が出来る。我自治は、半自治なりさ。此に於て、消したり、消さんだり、門衛の頭を殴つたり、殴らなんだりと云ふ、面白いだらう。ヤイドーダ」と、矢鱈に舌なめずりして居る。云ふ中に又、ドヤ〜と這入つて来た四五人の生徒に取まかれて、酔つた人も、酔はない人も、遠くの方に行つて仕舞つた。こんな事は、毎晩の様にあるよ。えらい饒舌つて、少々くたびれた様だが、誰か又、話しをする奴はないかな」とこれで第二の先生の話しも終つたのであつた。

が、皆思ひ合した様に黙つて居て、何とも云ふ奴はない。こんな話しを聞いたり、聞かされたりして居て、此の暗い部屋の中に、二週間位も居たであらう。すると或日、小使が

やつて来て、皆を連れて、怪我を治しに連れて行つてくれた。二三日もして、怪我也全快したので、又、寮へ歸つて、職務につく事になった。

思ひ起せば、この事があつたのは丁度三年前、それから、二度冬を越して、又、二度春を向へたが、其間、或は、東寮に居つた事もあるし、南寮に居た事もある。小使部屋にも居つた。怪我也五六度やつた。が、まだ、人の死ぬる処は見た事がない。尤も、妙に思ふのは、俺が来た時に、一番胆をつぶした、ストームが、其後、何十回となくやつた性が、今では至極、愉快になつて来て、三日に一度位無いと、何となく物足らない気がする。従つて、生徒の中には、随分、昵懇な連中が出来た。尤も仲のいゝのは化物、狼、ニグロ、辨慶、幽霊、章魚なぞだらう。云ふ内、今夜でも、此の連中が来て、連れて行つてくれはしないだらうかと、心待ちに待つて居るのである。これで今日迄の「俺の記」は終りとす

る。  
最後に、俺の名前も、既に解つたで有らうが、念の為に、人間が俺に付けてくれた名はランタンと云ふのだ、と云つて、そして筆を擱かう。(終)

三十八年二月十九日







# 青空文庫情報

底本：「尾崎放哉全集 増補改訂版」彌生書房

1972（昭和47）年6月10日初版発行

1980（昭和55）年6月10日増補改訂版発行

1988（昭和63）年10月20日増補改訂二版発行

※底本編集時に編集部の入れた注記（誤植が疑われる語句の正しい形、または編集部の追加したルビ）は除きました。注記のあった箇所は以下の通りです（底本ページ数―行数 該当語句）。

○P 171―L 1 「盗棒」全体

○P 171―L 3 「悪好者」の「好」

○P 176―L 11 「黒けつ」の「黒」のルビ

○P 178―L 10 「生末」のルビ

○P 197―L 9 「性か」の「性」のルビ

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2006年1月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 俺の記

## 尾崎放哉

2020年 7月17日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>